

令和 4 年 6 月 16 日現在

機関番号：32689

研究種目：奨励研究

研究期間：2021～2021

課題番号：21H03868

研究課題名 文学作品と歴史叙述作品の比較分析によるスンナ派ムスリム意識の解明

研究代表者

中野 さやか (Nakano, Sayaka)

早稲田大学・文学大学院・非常勤講師

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 470,000円

研究成果の概要：本研究では、イスラム史上初の年代記と評価されるタバリーの年代記『預言者と王の歴史』と、タバリーが情報源として使用したイブン・タイフルによる『バグダードの書』の比較分析を行った。9 - 10世紀に執筆されたタバリーの年代記によって、ムスリム社会において歴史叙述が確立されたと評され、タバリーの年代記研究はこれまで数多く行われてきたが、『バグダードの書』との比較分析は行われてこなかった。本研究では情報源である『バグダードの書』との比較分析により、『預言者と王の歴史』が、「アッバース朝カリフ政権の成立から解体までの過程」を描くことを目的としていることを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

中世イスラム史研究分野において、歴史叙述研究は近年隆盛している。その中でもタバリーの年代記は「ムスリム社会において歴史叙述を確立した作品」と評価されてきたため、これまで数多くの研究が為されてきた。本研究では、情報源であるイブン・タイフルの『バグダードの書』との比較分析によって、タバリーの視点を明確にした。また歴史叙述作品自体は、9 - 10世紀にムスリム社会の中では数多く執筆されていたが、その多くは散逸してしまっている。『バグダードの書』も現存するのはごく一部のみである。本研究で『バグダードの書』現存部分も分析した為、散逸した歴史叙述作品の性格も明らかにすることができた。

研究分野：イスラム史

キーワード：アッバース朝 タバリー イブン・タイフル 歴史叙述研究

1. 研究の目的

当研究では、タバリーの年代記『預言者と王の歴史』とイブン・タイフルの『バグダードの書』の比較分析を行った。

タバリーは西暦9世紀後半から10世紀前半に生きたアッバース朝の法学者・歴史家である。イスラーム法学者として有名だった彼は、年代記『預言者と王の歴史』も執筆し、この年代記はイスラーム初期史研究においては最も重要な作品として高く評価されている。その理由はヒジュラ歴2世紀から3世紀(西暦8-10世紀前半)の歴史書のほとんどが散逸している一方で、世界の創造から10世紀までを扱った『預言者と王の歴史』が完本として残っているためである。これは、政権交代や戦乱の時代を通じて『預言者と王の歴史』の写本の作成と保存が行われてきたためであり、『預言者と王の歴史』に見られるタバリーの歴史観が時代や地域を越えてムスリム知識人たちに支持されてきたことを表している。

タバリーが生きたヒジュラ2-3世紀にはアラビア語散文学が確立し、多くの歴史書がすでに執筆されていた。そのなかで、イブン・タイフルの『バグダードの書』は有名な作品であり、数多くの読者がいた。イブン・タイフルはタバリーの20歳年上であり、タバリーが『預言者と王の歴史』を執筆した当時は、既に著名な作家であった。『バグダードの書』はほとんどが散逸しており、西暦813年から833年までの記述のみ現存している。この現存部分と『預言者と王の歴史』の該当部分を比較したところ、該当部分の9割近くが『バグダードの書』からの引き写しであることが判明した。

そこで、当研究では、『預言者と王の歴史』と『バグダードの書』を徹底的に比較分析し、タバリーによる情報の取捨選択と逸話の配置を分析することで、タバリーの歴史観を明らかにすることを目指した。

2. 研究成果

タバリーの引用方法から判明した歴史観

(1) 情報源として名前や書名を挙げない

『バグダードの書』の現存部分(813年-833年)と『預言者と王の歴史』の該当部分を比較した結果、タバリーが膨大な引用部分において、一度もイブン・タイフルや『バグダードの書』を情報源として名前を挙げていないことが判明した。つまり情報源として利用するが、名前を残さないという引用方法であった。

(2) 『バグダードの書』からの情報の取捨選択、『バグダードの書』以外からの情報

タバリーが『バグダードの書』から選択した情報は、権力者個人の逸話ではなく、政権の盛衰に関わる情報であった。権力者の恋愛詩や甲歌とそれらの詩にまつわる逸話は全て選択していなかった。またイスラーム法で禁じられている養子縁組を宰相が行っていた、というイスラーム法に反する権力者の情報も選択していなかった。

『バグダードの書』以外の情報の多くは、カリフ政権に関する地方反乱とその鎮圧についての記述であった。これらの点からタバリーは「イスラーム共同体の権力構造の変化」や「カリフ政権の確立・維持・衰退の経緯」を描くことを目的としていることが判明した。

タバリーとイブン・タイフルの立場の違いと両者への歴史的評価

(1) 宮廷関係者と法学者

タバリーとイブン・タイフルの比較分析を行うに当たって、両者の立場や歴史的評価を調査した。その結果、イブン・タイフルがカリフの側近の子どもであった一方で、法学者であったタバリーは宮廷や権力関係者とは距離を保っていたことが判明した。

(2) 両者への歴史的評価

12世紀後半の文人政治家キフティーは、タバリーとイブン・タイフルの両者を取り上げて、タバリーの年代記『預言者と王の歴史』をより高く評価していた。キフティー以外にもイブン・タイフルの様々な作品は9世紀以降、数多くの著名な文人たちが言及しているため、タバリーの読者層であったムスリム知識人にとっても、イブン・タイフルの『バグダードの書』は知られている作品だった可能性が高い。

またタバリーの年代記は、その後多くの法学者たちがその手法を引き継いで書き継いでおり、その内の何点かは写本も現存している。

イブン・タイフルの名前を挙げずに大量の引用を行っているタバリーの手法は、現在では盗作と非難されるような行為だが、中世ムスリム知識人にとっては批判の対象ではなかったことが判明した。この点から、彼等は、自分にとって未知の歴史情報を得るために歴史書を読むのではなく、それぞれの作品における情報の取捨選択と逸話の配置によって描かれる作者の歴史観を知るために読んでいたことが分かった。

主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

研究組織（研究協力者）

氏名	ローマ字氏名
----	--------